

論文 | Article

「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」が
抱く期待を阻害し、
モチベーションを低下させる要因について：
インタビュー調査における内容分析を用いて

On the Factors that Hinder the Expectations
and Reduce Motivation of Enthusiastic Parents
Who Are Actively Involved in Youth Baseball :
Using Content Analysis in Interview Surveys

田中 充

TANAKA, Mitsuru

尚美学園大学スポーツマネジメント学部

Shobi University

2023年12月
December 2023

論 文

「少年野球に積極的に関与する、 熱心な保護者」が抱く期待を阻害し、 モチベーションを低下させる 要因について：

インタビュー調査における内容分析を用いて

田中 充

Article

On the Factors that Hinder the Expectations and Reduce Motivation of Enthusiastic Parents Who Are Actively Involved in Youth Baseball： Using Content Analysis in Interview Surveys

TANAKA, Mitsuru

要 旨

小学生の子どもたちが所属するスポーツチーム（クラブ）において、野球が盛んな日本では、昔から少年野球チームが全国各地で活動が続けてきた。しかし、小学生から高校年代までの競技者人口は近年、減少傾向にある。背景には、日本国内の少子化だけでなく、競技の多様化などの要因も指摘され、特に少年野球では、「保護者の労力負担」「金銭的事情」「怒号などが伴う旧態依然とした指導スタイル」が敬遠される3大要素に挙げられる。

こうした事情があるにもかかわらず、子どもが少年野球チームで活動することをサポートする保護者は一定数いる。一方で、子どもをサポートする保護者の中には、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）で少年野球の活動に関して問題点や改善点を指摘する投稿を行う人たちもいる。

子どもが少年野球をすることをサポートする保護者にとって、少年野球チームの活動において、どのような点がSNS投稿の引き金となっているのか。本研究は、子どもが少年野球チームで活動し、自身はSNSで野球に関する投稿をしている保護者に対し、オンラインを用いたインタビューによるデータ分析を通し、「子どもの野球活動のサポートに積極的に関与する、熱心な保護者」が抱く入会時の期待を阻害し、モチベーションを低下させるメカニズムを明らかにすることを目的としている。

保護者は、子どもの少年野球における活動において、練習時の見守りや指導者のサポート、練習場所への送迎、チーム運営の一翼を担うなど、様々な「周辺の」および「直接的」な役割に対して、労力や金銭的な負担を提供している。しかし、こうした負担に対する不満は、少年野球を敬遠する保護者とは違って多くはない。むしろ、子どもが野球に熱中できる環境の対価として当然のように受け止めている。

一方、技術指導が未熟だと感じたり、威圧的な態度を取ったりする指導者や、同じ熱意や目的で活動をしていない保護者に対する不満が、やる気を阻害させたり、モチベーションが低下したりする要因となっている。つまり、「子どもの野球活動のサポートに積極的に関与する、熱心な保護者」には、少年野球の活動を通じた子どもたちの成長に対する期待があり、そのための負担は惜しまないものの、指導者や周囲の保護者との間に生じる軋轢などの「人間関係」が、入会時に抱いた期待の阻害や、活動そのものへのモチベーション低下の要因となっている。

課題の解決には、チーム内での話し合いや、移籍によって環境を変化させるなどの手段が取られていく実態が明らかとなったが、特に移籍には制約などもあつて簡単ではない。

このため、少年野球チームでは、様々な目的意識を持つ保護者が混在する一方、居住区域から遠く離れたチームへの移籍にはハードルが高いことを背景に、「人間関係の悩み」を解消する手段が限られることが課題となっている。

Abstract

In Japan, where baseball is popular among sports teams (clubs) that elementary school children belong to, youth baseball teams have been active all over the country for a long time. However, the number of competitors from elementary school to high school age has been on the decline in recent years. In addition to Japan's declining birthrate, factors such as the diversification of sports have also been pointed out as factors behind this, and in youth baseball in particular, "parental burden", "financial circumstances", and "a coaching style such as yelling" are avoided. It is pointed out that there are three major elements.

Despite these circumstances, there are a certain number of parents who support their children's participation in youth baseball teams. On the other hand, some parents who support their children are posting on social media pointing out problems and areas for improvement regarding youth baseball activities.

For parents who have accepted their children to play youth baseball, what aspects of the youth baseball team's activities trigger them to post on social networking services (SNS)? This study conducted data analysis through online interviews with parents whose children are active on youth baseball teams and who themselves post about baseball on SNS. The purpose of this study is to clarify the mechanisms that inhibit the expectations and reduce motivation of "enthusiastic parents who are actively involved in supporting baseball activities."

Parents play a variety of "peripheral" and "direct" roles in their children's youth baseball activities, such as watching over practices, supporting coaches, transporting students to and from practice locations, and playing a role in team management. In response, they provide labor and financial burden. However, unlike parents who shy away from youth baseball, there are not many complaints about this burden. Rather, they take it as a matter of course as compensation for providing an environment where children can become passionate about baseball.

On the other hand, dissatisfaction with instructors who feel that their technical guidance is inexperienced or who act in an intimidating manner, or with parents who do not share their enthusiasm or purpose in their activities, can hinder their motivation or cause them to lose motivation. This is a major factor in the decline. In other words, parents who are passionate about supporting their children's activities have expectations for their children's growth through youth activities, and although they are willing to put in the effort to do so, they often experience conflicts that arise between them and the instructors and other parents. These "human relationships" are a factor in hindering the expectations they had when joining, and in decreasing their motivation for the activities themselves.

It has become clear that measures such as discussions within the team and changing the environment through transfers are being taken to resolve the issue, but this is not an easy task, especially as there are restrictions on transfers.

For this reason, in youth baseball teams, unlike high school baseball, where there is a clear division into strong middle school clubs and strong schools with a strong desire to play, there is a mix of parents with a variety of goals, and there are teams far away from the residential area. Due to the high hurdles for transferring to a foreign company, there are limited options for resolving "human relationship problems".

キーワード

少年野球 (youth baseball) / 保護者 (parents)
 子どものスポーツ (sports for kids)
 ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS)

1. 序 論

1.1. 研究の背景

小学生の地域スポーツにおいて、少年野球チーム（本研究における少年野球は小学生チームを対象とする）は大きな役割を果たしてきた。野球は今なお、日本国内で主要な人気スポーツである一方、野球の競技人口は減少傾向にある。少年野球チームにおいても、例外ではない。

また、子どもが団体・クラブ等に所属して行うスポーツにおいては、保護者に様々な関与・支援が求められる。少年野球も同様で、保護者の練習への協力が不可欠な一方で、家庭環境は核家族化や夫婦共働きなど、それぞれの家庭によって多様化している。また、野球用具はグローブやバット、練習着、試合用ユニホーム、その他の消耗品などで、子どもの習い事では高額な金銭がかかる傾向にある。また、監督やコーチによる怒号などが伴う旧態依然とした指導スタイルも根深いとされる。こうした背景から「保護者の労力負担（当番制、見守りへの参加要請、父母会などのコミュニティなど）」「金銭的事情」「怒号などが伴う旧態依然とした指導スタイル」が敬遠される3つの大きな要素といわれている。

一方、実際に少年野球に子どもが所属する家庭は、こうした環境を受け入れ、保護者が練習のサポートや、遠征時の車出しなどに積極的な関与がみられる。要因には、保護者が子どもの成長に少年野球が必要と考えていることなどが挙げられる。

しかし、少年野球に積極的に関与をしているとみられる熱心な保護者においても、昨今はSNS上などで、少年野球の構造的な問題、チームの運営や指導に関する方針、保護者間のトラブルなどについて、様々な不平や不満が投稿されている。

先行研究では、野球を含むスポーツ少年団における保護者の期待と評価をアンケート記述から分析した論文が見受けられた。そこで、本研究では先行研究の事例を参考に、「少年野球に子どもたちを送り出す熱心な保護者が抱く期待を阻害し、モチベーションを低下させる要因は何か」、「背景には、どのような事情が影響しているのか」について、質的調査のインタビューによって詳細を明らかにするものである。

1.2. 研究の目的

本研究では、田原（2013）が示したスポーツ少年団における保護者の期待と評価の分析項目に沿い、少年野球チームに子どもが所属する保護者が抱く「期待」を改めて確認するとともに、少年野球に入会した後の現状として「保護者の熱心な関与の根拠となる期待を阻害し、モチベーションを低下させた要因の有無」について調査した。

まず、本研究では、研究対象者として、子どもが在籍する少年野球チームにおいて、練習サポートや遠征時の帯同、父母会の活動などに参加し、さらに踏み込んでSNS上でも少年野球に関する情報を発信する保護者を「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」と定義する。

一般的に、保護者が少年野球に子どもを入会させる上では、「保護者の労力負担」「金銭的事情」「怒号などが伴う旧態依然とした指導スタイル」の3つの要素が敬遠される主な要因とされる。「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」は3つの要素のうち、少なくとも家庭内事情である「保護者の労力負担」「金銭的事情」に関しては一定の理解を示した上で、子どもが少年野球チームに在籍することをサポートしているとの仮説のもと、どのような期待を持って子どもたちに少年野球をしてもらいたかったのか、同時に、少年野球の現状で生じた、どのような不平や不満が、入会時に抱いた期待を阻害し、モチベーションを低下させた要因になったかを明

らかにし、改善策を考察した。

考察から得られる本研究の社会的意義として、「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」の当初の期待を阻害し、モチベーションを低下させた要因の背景を浮き彫りにし、改善策についての提言を見出すことで、減少傾向にある少年野球の普及・振興への一助になると考えた。

1.3. 先行研究の動向

先行研究で、田原（2013）は、スポーツ少年団に対する保護者の期待として、「対人関係に関する期待」「競技力・運動能力向上に関する期待」「精神の鍛錬に関する期待」「地域活性化に関する期待」「進学に関する期待」の5項目を挙げている。それぞれの項目の評価についても「人間関係に関する評価」「指導者に関する評価」「運営方針に関する評価」「保護者の負担に関する評価」「練習場に関する評価」の5つに分類して抽出した。

いずれも岡山県東部のスポーツ少年団の保護者を対象としたアンケート記述における内容分析で、回答数は124あった。この結果からは、それぞれの項目において、肯定的な評価と否定的な評価が得られた。

2. 研究の意義

田原（2013）が収集した回答は、アンケートによる量的調査である。このため、得られた知見は、項目ごとの分類を行う上で、特定地域（岡山県東部）という事情を考慮したとしても、一定の集団数を確保できるため一般化しやすい利点がある。

そこで、本研究では、インタビューによる質的調査を実施することで、保護者が抱く内面や背景など個別の事情に踏み込み、より具体的な情報を得ることができると考えた。とくに保護者が抱く期待に対し、否定的な評価に至った要因を明らかにすることが、今後の少年野球チームの運営改善策を検討する一助になる可能性があると考えた。

3. 研究方法

3.1. 対象およびデータ収集の手法

本研究では、田原（2013）が抽出した保護者の期待と評価について、より詳細なデータを抽出するため、SNS上で少年野球に関することを発信し、現在も子どもが少年野球チームに在籍する「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」を対象に、少年野球チームに抱いた期待と、子どもの所属後にモチベーションが低下した要因を明らかにするための質的調査を実施した。

データ収集の手法として、筆者は2023年6月、筆者自身のSNSのX（当時はTwitter）で不特定多数のフォロワーなどに協力依頼を告知した。また、X上で少年野球に関する主に問題点や子どもの活動について、情報を発信する保護者に対し、同年9月下旬までの期間に、X内でフォロワー同士が行えるダイレクトメッセージ（DM）を使って依頼内容を送信し、研究への協力を取り付けた。なお、当時のTwitterでは、筆者が少年野球に関して投稿している利用者にDMを送付することができたが、X移行後は、筆者と相互フォローの関係などDMを送付する条件が制限された。

このため、X移行後は相互フォローをしている保護者にDMを送信し、合意に至った研究対象者からインタビューを実施した。

対象者の選定に関しては、筆者が少年野球に関する投稿をしている保護者のコメント内容などを見て送付したため、多少の主観によって取捨選択した点が否定できないものの、返信があった

保護者のうち、現時点で子どもが少年野球を習っている保護者であり、オンラインによるインタビューを受けることに合意をした保護者はすべて研究対象とした。こうした事情から当初は5人へのインタビューを予定していたが、依頼と合意に至るプロセスからほぼ同じタイミングで複数の保護者が協力に応じる意向を示したため、7人を対象者とした。

調査は、いずれの保護者に対しても、オンラインによるインタビューで行った。

3.2. データの分析方法

インタビューは、対象者の属性、子どもの学年、父母会や当番制の有無、練習の見守りや練習サポートがどこまで自主性に委ねられているかなどを全体的に網羅した上で、田原（2013）が示した保護者の「期待」に関する5項目とその後示された評価について、本研究対象の保護者にも同じ項目が該当するかなどを聞き取りした。その上で、対象の保護者が、自らの子どもが少年野球に入会した当時の期待と、その後モチベーションを低下させられる要因を詳細に聞き取り、インタビューの回答で得られた主要なワードを抽出する形でテキストを作成した。

3.3. 研究対象者への倫理的配慮

尚美学園大学の倫理委員会に研究計画書などを提出し、承認を得た。また、対象となる保護者には、研究の趣旨を文書および口頭で説明し、協力の承諾を得た。この際、研究への参加は自由意志であり、研究成果の公表には、個人が特定されないように匿名化を確保することや、データの管理には細心の注意を払うことを説明した。その上で調査の趣旨・方法について同意を得た保護者のみにインタビュー調査を実施した。結果的には、7人全員がインタビュー調査の協りに同意した。

また、SNS上への投稿は匿名であるため、筆者は、インタビュー対象者の子どもが実際に少年野球チームに所属していることを厳密には確認が取れない。このため、説明および合意書において、子どもが少年野球チームに入会していることを前提とした研究である旨を明記し、サイン（デジタルを含む）を受け取っている。

3.4. 調査対象者と属性について

調査では、インタビュー冒頭に年齢（年代）、家族構成などを質問し、少年野球に現役で所属している子どもの学年、入会した当時の子どもの年齢などを口頭で確認した。なお、複数の子どもが少年野球で活動していたり、過去に年上の兄弟が在籍していたりする場合もあったが、属性には、現在も所属している子どもの学年と性別を記載している。属性は表1で記載した。

表1 インタビュー対象者の保護者の属性

呼称	性別	年齢	居住地	野球をしている子どもの学年	子どもの性別	野球に関するSNSを始めた時期
Aさん	女性	40代	神奈川	小学2年	男子	2022年ごろ
Bさん	男性	30代	愛知	小学3年	男子	2022年ごろ
Cさん	男性	50代	千葉	小学5年	男子	2019年7月
Dさん	男性	30代	埼玉	小学2年	男子	2023年5月
Eさん	女性	40代	兵庫	小学6年 小学3年	男子 男子	2、3年前ごろ
Fさん	男性	30代	愛知	未就学（年長）	男子	2022年10月
Gさん	男性	40代	神奈川	小学5年	男子	2019年ごろ

3.5. 調査期間

2023年7月～9月

3.6. 調査方法

対象者に対し、個別にオンラインによる1時間程度のインタビューを実施した。

4. 分析結果

4.1. 「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」が子どもの入会時に抱いた項目

インタビューのテキスト分析から、「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」が子どもの入会時に抱いた項目について、田原（2013）が示した保護者の期待に関連する①対人関係に関する期待②競技力・運動能力向上に関する期待③精神の鍛錬に関する期待④地域活性化に対する期待⑤進学に関する期待の5つの項目で分類をした。分類の根拠となった文言と合わせて、表2で示した。

表2 子どもが少年野球を始めたときに抱いた主な期待と5項目による分類結果

呼称	5項目の期待による分類結果
Aさん	「町内会のチームに入って、学校に通えるようになってほしかった①」 「単純に野球を楽しく、うまくなればいいかなあ②」
Bさん	「コミュニケーション能力は、学力より大切なものと感じている。野球を通じて知るという機会になると思って、すごく重要視していますね①」 「野球があったからこそ、備わった力だと思う。息子にもその力がついてほしいなどは思っています③」
Cさん	「対人関係というのは集団行動とかで身につくかなと思ったのでその期待もありました①」 「上のお兄ちゃんのとときに（野球を）教えてあげることができなかった。うまくさせたいという思いがあった。競技力と精神の鍛錬が身につくことですかね②③」
Dさん	「子どもが引っ込み思案で、なにか自信を持てるものを身につけてほしい①」 「走るのが速かった。親としては将来、息子が活躍するんじゃないかと淡い期待があります②」 「やりぬく力を身につけてほしかった③」 「やるからにはプロを目指してほしい⑤」
Eさん	「周りとの関係性をつくるとか、あとは体力づくりをしてもらったらいいな、みたいなところはあって①②」 「精神面のところもありましたね③」
Fさん	「友達をつくってほしいとか、新しい友達ができればいい。そこが一番大きいですね①」 「本人が楽しくできて、徐々にうまくなっていけばいい②」 「最低限の礼儀、努力する大切さは徐々に身につけてほしい③」
Gさん	「内気なところがあったので、色んな大人やお兄さん方と関係をもってほしい。教えてもらえること、助けてもらえることをたくさん経験してほしい①」 「足が速くなったらいい②」 「目標に向けてステップアップしていくというのがあればいい③」

次に表1で記した期待に対し、子どもが入会后、「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」がモチベーションについて、低下させられた主な要因と、その対象をインタビューのテキストから分析した。要因と対象について、根拠となった文言と合わせて表3で示した。

表3 少年野球に積極的かつ熱心に関与する保護者がモチベーションを低下させられた主な要因

呼称	期待に対するモチベーションを低下させられた要因（要因の対象）
Aさん	<p>「もうちょっと教えてくれてもいいんじゃないと思った」（指導者）</p> <p>「試合にスタメンで出ている子がいると、そうじゃない人の保護者の妬みがすごい」（他の保護者）</p> <p>「他の保護者がうまい子の悪口をいう」（他の保護者）</p>
Bさん	<p>「一貫性がない指導が多い」（指導者）</p> <p>「言うことを聞かないと理不尽な怒られ方をした」（指導者）</p> <p>「ふざける子がいると、真面目にやろうとしているメンバーたちの練習が滞ってしまうこともあるので、親が管理して欲しいなという部分は正直ある」（他の保護者）</p>
Cさん	<p>「指導力ですね。指導者が勉強しないとだめですね」（指導者）</p> <p>「お父さんが全然来ない家族ばかりで、ママが中心になっている」（他の保護者）</p>
Dさん	<p>「僕の価値観で言えば勝たせたい。でも、保護者の中には楽しければいい、勝たなくていいという人がいて温度差がある」（他の保護者）</p>
Eさん	<p>「技術の指導とかそういったことに関しては教え方、伝え方とかです。教える人たちがプロではないので、やっぱりボランティアだからボランティアなりなのかなと思うときがあります」（指導者）</p> <p>「お父さんとお母さんでサポートの役割が結構違う。お母さんだからと、お茶を出すなど、すごく女性的な役割を積極的に求められます」（チーム）</p> <p>「6年生の人数が少なかったんで、試合についてくことが多かったんですけど、学年ごとに運営方針が全く違って、（練習の）見守りとかお茶出しをやらされる」（他の保護者）</p>
Fさん	<p>「子どもに対して怒声ですごく強く言う。指導者の子どもに対する態度、接し方に違和感をおぼえました」（指導者）</p> <p>「指導者から子どもが『やる気がないなら帰れ』『野球やらなくていい』と言われて、代表に話したら『チームとしてそれはよしとされている』と言われました」（チーム）</p>
Gさん	<p>「指導者は野球を知っている方なので、指導内容に関しては、先輩たちも、ものすごく上手になっていたのでもいいとは思いますが、その中で暴言だったり、いすを投げたりというのがありました」（指導者）</p> <p>「（移籍後のチームで）私が監督をしていることに、チームの代表が不満を持っているようで、モチベーションを下げられています」（チーム）</p>

次に「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」がモチベーション低下を防ぐために、要因の対象に対して行った対策について、インタビューのテキストから分析した。根拠となった文言と合わせて表4に示した。

表4 モチベーション低下を防ぐために行った対策

呼称	モチベーション低下を防ぐために行った対策と根拠となる文言
Aさん	「他の保護者とあんまり一緒にはいない。お母さんの輪には入らない」(他の保護者)
Bさん	「昨年からクセのある指導者だとわかっていたので、今年はほかの保護者の父親を指導者としてしっかりベンチに入れて、その方の暴走を止めるというような方針がとられている」(指導者) 「(方針が違う保護者には) 違うところでやって欲しいって思うが、受け皿があるわけではないので、正直、諦めています」(他の保護者)
Cさん	「チームを移籍した。(指導者が) 勉強不足だなと感じたので、任せておけないなと思いました」(指導者) 「親はやっぱり変わらないんですけど、僕はこのチームで戦いたいと思えたので、親は置いといて、子どもたちとだけ向き合うようにしています」(他の保護者)
Dさん	「一度、保護者間で話す場を設けたが、決裂した。平行線のまま話が終わり、けっこう険悪になりました。そこから、その人たち(温度差のある保護者)とは口も聞かない。もっと(他の保護者も)意識の高いチームへの移籍を考えています」(他の保護者)
Eさん	「監督さんとかがへそを曲げてしまう可能性があるなっていうのもあるので、考え方を急激に変えるっていうのは難しい。なので、(お茶当番を) 全くやめるのではなく、うまく手を回して負担を軽くしようと思っています。断るときもありますね」(指導者) 「ガチの男社会なんだって思って、仕方ないかなって思う部分もあります」(チーム) 「結構、指導が変わってきたから、まあそれはいいかな」(指導者)
Fさん	「チームを移籍しました。保護者がお茶や珈琲を出す文化も負担もなく、指導者の罵声禁止などの理念に共感して入会したので、全く不満はないですね」(チーム、指導者)
Gさん	「移籍するしかなかった」(指導者) 「うまくやろうとはしているけど、なかなかできていないです」(他の保護者)

また、少年野球では入会を敬遠する要因として挙がる「保護者の労力負担」「金銭的事情」「怒号などが伴う旧態依然とした指導スタイル」と、「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」の認識を明らかにする。インタビューではそれぞれの要素に対し、対象者の見解を質問した。

「保護者の労力負担」については、「負担には感じていないですね」(Aさん)、「保護者の皆さんの力が必要だと思う。負担にはなっていません」(Bさん)、「仕事が忙しいときは欠席できるので、別に負担とは感じていない」(Eさん)「妻は違和感を持っていたが、まあしょうがないかな」(Fさん)「負担には感じますが、子どもたちと一緒に何かするのが楽しいので、苦ではない」

(Gさん)と概ね否定的な見解がなかった。

「金銭的負担」についても「駐車場代なども自己負担だけど仕方がない。用具なども長い目で購入し、負担には思いません」(Aさん)、「裕福だとは思わないが、負担がそこまで大きいとは思わないです」(Bさん)「お古をいただいたり、割引で買ったり工夫をしているので、そこまで負担には感じていない」(Eさん)「道具にお金がかかるのはわかっていたので了解の上」(Fさん)「それほどでもないです」(Gさん)、他にもいずれのケースについても、「子どもが頑張っている。親の負担はないと言いたい」(Cさん)「全く負担には感じていない」(Dさん)などと概ね、受け入れていることが示唆された。

反面、「指導者スタイル」については表3で挙げたように、「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」が抱く期待に対し、モチベーションを低下させる要因に挙げられていた。

4.2. 「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」と、少年野球が敬遠される3つの要素との関係について

上記により、「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」は、少年野球が敬遠される3つの要素のうち、少なくとも家庭内事情である「保護者の負担」「金銭的事情」に関しては一定の理解を示した上で、子どもが少年野球に在籍することをサポートしているとの仮説には、一定の説得力があることが証明された。一方で、チームや指導者、他の保護者との「人間関係」に対する悩みが、子どもの活動をサポートするモチベーションを低下させる要因となっていたことが浮き彫りとなった。

以上のことから、インタビュー内容のテキスト分析によって、「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」は、自らの子どもが少年野球に打ち込む上で、様々な負担を受け入れてサポートしていることがわかった。それは子どもの成長への期待があるからである。一方、少年野球の保護者はさまざまな事情の人が混在し、「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」からすれば、同じような熱意でサポートをしない他の保護者には「同じ方向を向いて欲しい」(Cさん)「温度差がある」(Dさん)などの不満があることがわかった。また、指導者に対する不満、チーム運営に対する不満も、モチベーションを低下させている要素となっていることが示唆された。

「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」が子どもの入会時の期待を阻害されたり、活動におけるモチベーションを低下させられたりしている現状を改善する策としては、チーム内での話し合いなどの「内的変化」による解決は難しく、チームを移籍するなどの「外的変化」が有効であるほかは、打開策が見当たらず、我慢を強いられている状況が明らかとなった。

5. 考 察

少年野球チームにおいて、保護者間のトラブルを回避するには、他の保護者との「温度差」の解決が根本的な原因となっている。しかし、これが一筋縄ではいかないのは、少年野球の特殊な事情が背景にあるといえる。

具体的には、少年野球は原則的に、居住地域やその近隣で活動する少年野球チームに所属することとなり、そのチームの運営方針は、幅広く子どもたちを受け入れるものとなっている。一方、保護者間では「子どもがもっとうまくなってほしい」「チームが強くなってほしい」と願う保護者がいる一方、「楽しければいい」「勝たなくてもいい」と考える保護者も一定数いることが伺いしれる。

今回は、「少年野球に積極的に関与する、熱心な保護者」を対象としたインタビューとなったことで、消極的な関与にとどまる保護者に対する否定的な意見が大半を占めたが、一方で、「相

手側（消極的な関与にとどまる保護者）からすれば、研究対象者がモチベーションを低下させているのでは」との質問に、インタビュー内容からも「うるさい存在だと思われる」（Dさん）などの回答が得られた。

本来であれば、近隣地域内において、「勝つこと、うまくなること」を目指すチームと、技術よりも振興・普及を目標とするチームが理念ごとに明確化され、保護者が子どもの意向を汲んだ上で、自らの考え、負担状況も考慮して、それぞれの家庭に合ったチームを選ぶことができる環境が理想的だろう。

しかし、現状では、原則的には居住区域内のチームに入ることが前提とされ、移籍については、統括する全日本軟式野球連盟も、同年度内では、転居や旧チームでのハラスメント被害などの考慮すべき事情がない場合には原則的に認めていない。このため、子どもがいったん所属したチーム内において、様々な考えを持つ保護者が混在し、互いに入会時の期待を阻害し、モチベーションを低下させている構図が浮かび上がっている。

6. 提言

少年野球チームは昔から地域と密接につながり、子どもたちの保護者やOB・OGの保護者が指導者をボランティアで務め、保護者も練習を見守るなど、特殊な環境で成り立ってきたのが実情である。同じ地域という共通項で所属している保護者間では、本研究でも明らかになったように、野球に取り組む熱意や方向性に違いが生じるのは当然である。

こうした事情が、保護者同士の軋轢を生じさせ、子どもの成長のために少年野球をサポートしようと入会を後押しした保護者のモチベーション低下の要因となっている。また、昨今は、子どもたちの上達に熱心な保護者らが動画共有サイトなどで知見を広めるなど、技術指導面においても、保護者自らが従来より豊富な知識を有するようになってきていることがうかがえる。この点が、監督・コーチなどの指導力不足や理不尽な指導への不満につながるだけでなく、双方の溝が埋まらないことで、保護者のモチベーションに影響していることが示唆された。

保護者、指導者、チームといういずれも「人と人」の関係悪化の解決策としては、本研究のインタビュー対象者も実行していたチームの移籍は有効な側面を持っている。しかし、「移籍」「地域間をまたいでの入会」などは現状、例外的な措置にとどまっている。

インタビュー対象者は、「少年野球の活動に積極的に関与する、熱心な保護者」であるがゆえに、移籍という高いハードルも選択肢に持つことができているが、一般的な保護者が全てこうした行動を視野に入れることができるとは考えにくく、子どもが少年野球をしている家庭では、一定数の保護者が不満を抱えていることも示唆された。

少年野球の競技者人口は、全日本軟式野球連盟が登録選手数を集計し始めた2017年度には約20万5000人だったが、22年度には約17万人と減少傾向が続く。背景には、日本全体の少子化や、習い事の多様化なども指摘される一方、少年野球特有の事情があることも否定できない。こうした状況に歯止めをかけるためにも、従来の風習にとらわれない環境が求められており、全日本軟式野球連盟などが、踏み込んだ策を打ち出すことが期待される。

最後に本研究の課題を述べる。子どもが少年野球チームに所属し、SNSに少年野球に関する情報を投稿している保護者を対象とした今回のインタビューによって、保護者が少年野球に抱いた入会時の期待を阻害されたり、モチベーションを低下させたりした要因の一部を明らかにできたと考える。一方で、少年野球に関わる家庭の事情は多様化しており、夫婦共働き世帯や核家族世帯、夫婦の勤務形態、子どもの兄弟の有無などによっても、インタビュー内容に変容の可能性がある点を指摘し、今後の研究につなげたい。

引用・参考文献

- 田原陽介（2013）スポーツ少年団における保護者の期待と評価の分析～アンケート記述における内容分析を用いて～. 環太平洋大学研究紀要, 7:275-280.
- 宮本幸子（2023）子どものスポーツ活動をめぐる母親たちの社会関係資本—なぜ母親たちは「周辺の役割」を担い続けるのか—. スポーツ社会学研究, 31（1）: 71-82.
- 宮本幸子（2023）母親がささえる子どものスポーツ—実態と研究課題—. 年報 体育社会学, 4: 23-33.
- 公益財団法人 全日本軟式野球連盟（2022）令和4年度各種規程・ルールの変更について.
<https://jsbb.or.jp/docs/29747feeac267b0e2e9dc87627f2fdd964ef2679.pdf>
- 田中充（2023）人口減少社会とスポーツと子ども いまだ根付く「昭和型」野球論 交錯する保護者の本音, Wedge ONLINE（ウェッジ・オンライン）,
<https://wedge.ismedia.jp/articles/-/31590?page=3>, (2023年10月5日閲覧).

